

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑫

西条市と久万高原町の境に位置する石鎚山は標高1982メートル。西日本最高峰であり、地元のみならず松平野や遠くは中国地方などからも眺望できることから、古くから信仰の対象となり、修行の場としても知られていた。

文献史料での石鎚山の初見は平安時代の前期、797（延暦16）年に空海が記した「聾瞽指帰（ろうこじき）」に、自ら修行した場所として「石峯」が挙げられ、「伊志都知能太氣（いしつちのたけ）」と記されている。そして、820年頃成立の説話集「日本靈異記」には、奈良時代の石鎚山での修行者が登場する。それによると、寂仙（じせん）

朝廷編さん国史に記録

転生譚（たん）はその嘉智子が亡くなつた際の伝記（没伝）に中に含まれている。

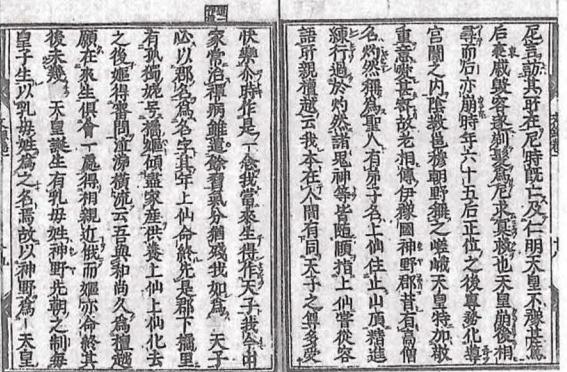
このように、後世に語られた民間伝承ではなく、当時の朝廷が編さんした国史に記録された説話で、多くの貴族や僧侶の間で語られてきた。それだけ平安時代前期に石鎚山は広く知られる存在であったといえ

るだろう。

（専門学芸員・大本敬久）

△ 随時掲載します

古代石鎚修行僧の転生譚



「日本文徳天皇実錄」。878（元慶2）年成立、1796（寛政8）年刊。県歴史文化博物館蔵

のは上仙となつており、上仙は山頂に住み、修行に励んで師の灼然の後を継ぎ、鬼神を自由に使役した。そして常に天子に生まれたいと願い、臨終の際に人々に「もし天子に生まれたら郡の名前をもつて名字とする」と予言して亡くなつた。その後、天皇に皇子が誕生するが、その時代は乳母（めのど）の姓を皇子の名前とする慣習となつており、乳母の姓が神野であつたことから神野親王となつたと記される。また、神野郡の橘という所に、上仙を熱心に供養した橘の姫（おうな）という女性がいて、嵯峨天皇の皇后となつた橘嘉智子に生まれ変わつたとも記される。橘嘉智子は皇太后、太皇太后として活躍し、850（嘉祥3）年に亡くなつた。石鎚で修行した上仙や橘の姫の